

文芸時評 斎藤三千政

著者は本書の「まえ 自分が一番びっくりがき」の中で次のように告げている。

——言葉で遊ぶ、言葉で遊ぶ、言葉に遊んでみよう。遊びだけを思って生きてきた生きても面白がってくれる御仁がらあがりだぞ。

次郎が書いた本書の帯文に触れて、作者はこういうのだ。

真面目な詩集だと思っ
ているらしいのがいかに
も冗談風でおかし
い。とにかく、ユーモ
アに乏しい筈の純粹の
津軽人が書いたのだか
ら、私の認識を改めね
ばなるまい」石坂洋次
郎(署名)——東京の

わが青森県が生んだ
偉大な歌手、ブルース
の女王、とも呼ばれた
淡谷のり子さんについ
て少しだけ触れる。

具としての言葉を与え
てくれた沢山の友人知
人たち。それを面白が
って並べてみてくれた
井上サマ。本の泉社サ
マ。そしてこのびっく
り箱を手にとっていた
だいた皆サマ。たとえ
購入しなくても一度は
手に取って持ち上げて
くれたことに感謝を申
しあげます(ここまで
言われたら)などと言
た。……

伊奈かつぺい著『言葉のびっくり箱 伊奈かつぺい綴り方教室』

かもしれない——いや、笑い出すかもしれない。しかし、著者は

言葉遊びの楽しさ

言葉のびっくり箱

伊奈かつぺい綴り方教室



伊奈かつぺい

「この約束は紙に書いておこう。いつでも破れるように」言葉と遊びを続けること50年あまり、「遊んで楽しむのが好き」をモットーとする著者の技が冴えわたる。産経新聞(東北版)連載コラム「言葉の筋肉」からエッセンスを完成し、著名なイラストレーター「落書さむし」を加えて完成。好評雑誌「言葉のおもちゃ」に続く、待望の第2弾!

「言葉のびっくり箱 伊奈かつぺい綴り方教室」

文化

郎(署名)——東京の評論家より青森県出身の小説家の方が上だと今でも思っている。うん。……

評でも言っておきましようか。自分が一番楽しんでいる言葉遊びを並べて、自分が一番勝手に楽しんでいるような一冊なのですか。

さて、石坂洋次郎と伊奈かつぺいが、初めて直接出会ったのが、1974年で、場所は青森駅のホームであったという。

の受け取りを理由に青森駅のホームでお出迎えてご挨拶しようではないか、と。そこで私の若くあかるい歌声にも似た笑顔に「おお、君がカッペイくんか」と相成ったのである。話が急に変わるが、

さらには……「まだ続いておられますか」「まだ遊んでおられますか」とも。こうして本ができました。『おもちゃ箱』に続く『びっくり箱』。(中略)遊び道

とお願いしていた。運よく近々、つまりこの日に何とかの所用で青森においでになるとのこと。ならばその署名

の元気に驚く」と記している。かつぺいさんは淡谷のり子さんの「歯に衣着せぬ発言の数々。いかにもとした大物の存在感を示して小気味良かった」と評し、さらに若い上手

——終わりに——
※「言葉のびっくり箱 伊奈かつぺい綴り方教室」は、四六判、264頁、税込み1500円。本の泉社発行